



城

 第三十七回 にらやまじょう 韮山城

～後北条一族の意地の見せ所～

山本 忠博

第35回では、後北条家の興りの話として堀越御所の話をしました。今回は、後北条家の終焉の話として、堀越御所から北東約1.6kmほどの所にある韮山城にらやまじょう（静岡県伊豆の国市）をご紹介します。後北条家を没落させた豊臣秀吉の小田原征伐は、戦いの規模が大きいため、関係する攻城戦の話は幾つもあります。激闘を展開した城もあれば、あっさり落ちた城もあっていろいろですが、韮山城は、最終的に開城したとはいえ、激戦を繰り広げて後北条家の意地を示した城です。そして、この城の城主のを知ることで、小田原征伐の開戦前から終戦後に至るまでの、事の顛末が見えてきます。

韮山城

韮山城の原形を築いたのは、堀越公方の足利政知ほりこしきぼう あしかがまさとも（第35回参照）の配下であると言われていています。そして、北条ほうじょう早雲そううんの伊豆討ち入りによって堀越公方が没落すると、早雲によって韮山城は拡大、整備され、後北条家による伊豆国支配の拠点とされました。早雲は、後北条家が関東への侵出を始めた後も、この城を本拠とし、この城で没しています。

その後、後北条家の本拠が小田原城に移った後も、この城は伊豆国の拠点として重きをなし、後北条家の三代目の氏康うじやすの代に、その五男の氏規うじのりが城主となりました。

氏規とは

後北条家の四代目と五代目に関わる人々は、小田原征伐に敗れたために、なにかと無能との評価を受けますが、彼らのそれまでの業績を冷静に判断すれば、そうではないことが解ります。

名将の誉れ高い三代目の氏康には、8人の男子がいました（ただし、長男は夭折）。四代目を次男の氏政うじまさが継ぎま

すが、この代変わりに御家騒動らしきものはいっさいなく、氏政に滞りなく権力の移行がなされ、弟達はいずれも氏政を良く助け、兄弟相和して推定240万石の最大版図を築きました。歴代からの充実した民政を継続したため、領民にも慕われたといえます。後北条家の特徴は、初代から五代に至るまで目立った内部抗争がなく、意見の対立はあっても、合議の末の宗家の決定には皆が従うという結束の固さにあります。

そんな後北条家の氏規ですが、彼は、主に外交の分野で活躍しました。幼い頃に隣国の今川家に人質に出されており、同じ境遇にあった徳川家康とは旧知の仲だったと言われ、本能寺の変後に敵対していた後北条家と徳川家の同盟を成立させています（第20回参照）。

氏規の上洛

豊臣秀吉は、天正13年（1585年）に関白に就任してすぐに四国を平定し、翌年には、家康を臣従させた後に太政大臣に昇り、さらに、天正15年に九州を平定しました。この時点で、秀吉に臣従していないのは、一部を除く関東と東北だけとなり、秀吉の次なる攻撃目標は関東の雄の後北条家となります。

秀吉は、氏政、氏直父子に上洛を勧告し、徳川家康も同盟者である後北条家に対して、氏規を通じて、秀吉への臣従を勧めています。氏規は、自分達が秀吉に適し得ないことを覚り、これに氏直も同調します。氏政も上洛に反対していたわけではないので、この時点での後北条家の基本路線は、氏政、氏直父子の上洛の方向で一応固まっていた。そこでまず、氏規が上洛することになります。

氏規が上洛して秀吉に謁見したのは、天正16年（1588年）のことですが、この謁見が氏規にとっては屈辱的なものでした。謁見の場所となった聚楽第じゅらくだいは、太政大臣という公家の最高位にいる秀吉が、公家の政庁として建てた側面を

もっており、参上する者は朝廷の官位をもっているのが当たり前でした。そのため、氏規が広間に案内された際に、その場に居並ぶ諸侯達は公家としての正装をしていたといひます。しかし、秀吉の家臣ではない氏規には朝廷の官位はなかったため、公家の正装など着ることもできず、たいへん惨めな思いをしたといひます。氏規は、その場では、氏政、氏直の上洛の条件を述べ、その条件が満たされた暁には、両者のうちのいずれかが上洛することを約束していますが、謁見の直後に、「田舎者と侮られて恥をかかされた。これでは、兄氏政が上洛したところで良いことはない……」と嘆息したとも伝わります。

秀吉との手切れ

氏規が上洛した際の情勢は、家康が秀吉と対峙していた時とは大きく変わっていました。この時点での秀吉の勢力は、西日本、東海、中部、北陸に加え、一部とはいえ関東、東北にまで及んでおり、まさに怖いものなしで、かつて家康に与えたのと同じ厚遇を後北条家に与える気など、さらさらなかったものと思われまふ。秀吉からすれば、家臣に与える新たな領地もなくなってきたところなので、後北条家を臣従させるより、むしろ潰してしまいたかったのかも知れません。

そんな中で、事件が起こります。後北条家の家臣が、秀吉の家臣である真田家の城を勝手に奪取してしまったのです(名胡桃城事件：第17回参照)。これに秀吉は激怒し、後北条家が弁明の使者を送っても聞き入れず、秀吉と後北条家の手切れとなってしまいます。

韮山城の戦い

天正18年(1590年)の秀吉と後北条家との戦い、いわゆる小田原征伐(第9回参照)が始まると、氏規は、自身の持ち城の韮山城で豊臣軍を迎え撃ちました。攻める豊臣方が4万数千で、氏規方は3千数百だったといひます。氏規は、もともとは積極的和平論者で秀吉との戦いを避ける努力をしてきた人ですが、いざ戦が始まると一転して勇猛果敢に戦いました。氏規は、かなりの数の鉄砲を城に入れていたようで、この鉄砲を撃ちまくり、自らも撃って出て攻め手を蹴散らしたようです。攻め手は、城からの猛烈な反撃を受けて、開戦2日で力攻めを諦めたといひます。

そこで豊臣方は持久戦に切り替え、韮山城の周囲に無数の陣地を構築して完全に包囲しました。ここから戦況は膠着し、結局3ヶ月の間、韮山城は持ち堪えることになりました。

小田原征伐が始まって3ヶ月の時点で、後北条方で残った城は、小田原本城と、忍城(埼玉県行

田市：第30回参照)と、韮山城の3つだけとなっていました。ここで家康が氏規の説得に乗り出し、最終的に氏規もこれを受け入れました。こうして、10倍以上の敵を向こうに回して行われた氏規の徹底抗戦は終わりました。

後北条家の人々のその後

韮山城を開いた氏規は、小田原本城の氏政と氏直のもとに向い、無益な戦いを終わらせるように説得を行いました。氏政、氏直父子もこれに折れ、後北条家は降伏することになります。

秀吉は、戦後処理で、氏政を主戦派と見なして切腹させ、氏直と氏規を和平派とみて命を助けることにします。氏政の切腹の際に介錯を務めたのが氏規で、彼は、事が終わった直後に自決しようとしたところを、それを予測していた家康の家臣によって制せられたと伝わっています。

その後、氏直と氏規は高野山で謹慎しますが、天正19年(1591年)には赦免され、氏直は1万石の大名として復活する予定でした。しかし、その矢先に彼は病死してしまいます。そのため、氏規が慶長5年(1600年)に死去した後に、後北条氏の宗家を氏規の嫡子が継承し、河内国(現大阪府)の狭山藩1万1千石の藩主となりました。そして、当藩は幕末まで後北条氏の家名を保つこととなります。

韮山城の現在

韮山城は、散策路が整備されていて誰でも気軽に立ち入れる状態にあります。現在でも防衛陣地の形跡が良く残っていて見ごたえ抜群です。

最頂部からの景観は絶景で、晴れた日には富士山も眺められます。この景色を見るだけでも価値がありますから、伊豆の温泉旅行のついでにでも立ち寄ってみてはいかがでしょうか。



韮山城からの眺望